

第11章 多様性を見たアジア総局長時代

多様性のアジア全域に挑戦

一九八四年の六月。中英両国の政府間交渉で歴史的な転換期を迎えた香港から、「ネーション・ビルディング」(国づくり)二十五周年を間近に控えた赤道直下のシンガポールに移った。

香港からシンガポールへ

両地とも二度の赴任だったが、ムンムン人いきれのする雑踏の街・香港に比べると、十四年ぶりのシンガポールは、清潔で秩序整然とした都市国家に変ぼうしていた。半面、融通性のある「レッセ・フェール」(自由放任)な香港とは対照的に、シンガポールは箱庭のように管理された、むしろ窮屈な感じを抱かせる場所となっていた。

同じ「華人」(中国系市民)中心の社会、しかもアジアで屈指の発展を遂げてきたシンガポールと香港。両者のこの相違を、どうつかみとればいいのか。これらを中国大陸と台湾、そして世界各地に散在する広大な華僑・華人社会との関連の中で考えれば、興味深い、大きな研究テーマになりそうだ。

他方、ここからアジア全域を見渡すと、もっと難解で巨大な現実的問題にぶつかる。アジアには中国の十一億(現在は十二億強)、インドの七億(今は九億以上)を中心に、世界の半数を超える人口がひしめく。しかも、多民族、多宗教、多様な文化、そして社会制度を異にする国家群が入り乱れている。そこに重くのしかかる戦火のカンボジア。同一民族でありながら、分断されたままの国家もある。朝鮮半島の南と北、中国の大陸と台湾。それに域外諸国、とりわけ米ソ両超大国の影響力も無視できない。

一口にアジアの平和と安定、協力と繁栄と言っても、それを解きほぐす方程式は、容易に見出さそうにない。「アジア総局長」として、これからどんな視角で、複雑な鼓動をとらえ報道していくか。希望と同時に、いささか気の重い赴任であった。

成長した ASEAN 諸国

そんな中で、最初の“勉強の場”となったのが、着任間もない七月初旬、インドネシアの首都・ジャカルタで開かれた第十七回東南アジア諸国連合(ASEAN)＝タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピン、ブルネイ＝の定期外相会議と、これに続く日米など域外先進諸国を加えた拡大外相会議だった。中心のテーマは、「カンボジア問題の解決」と「太平洋諸国間の協力」。

カンボジア問題で、特に注目されたのは、「ベトナム軍のカンボジアからの早期撤退」とともに、ASEAN 外相会議としては初めて「カンボジア国内の全勢力による民族和解政府の樹立」を、一致して強く求めた点だった。そこには当然、民主カンボジアの三派連合(シアヌーク、ソン・サン、ポル・ポト各派)と、これに対立するヘン・サムリン政権も含まれていた。

三派連合の軍事的中心勢力であるポル・ポト派の排除を強く迫るベトナムとソ連。逆にヘン・サムリン政権をベトナムのかいらいと見る中国や米国。ポル・ポト派とヘン・サムリン政権の処遇をめぐるのは、ASEAN 諸国の内部にも見解の相違がある。こんな中で、「問題解決の大前提は、あくまでもカンボジアの内部に全勢力、全党派による民族和解ができることだ」と訴えた ASEAN 外相会議の提案は、内外のしがらみを十分承知した上での新しい知恵だ、と感じられた。

太平洋諸国間の協力問題でも、米国を中心とした域外先進諸国に、高金利政策の是正と、途上国の累積債務への対処策を強く求める一方、「人づくり」面での協力には、積極的な姿勢を示した。特に、次代を背負う青少年の交流強化、高度技術の発展に対応した人材開発などについては、次回以降の拡大外相会議で、継続的な審議を強く望んでいた。人づくり

による幅広い技能形成、そこから生まれ出る主体的な国づくり。こんな意欲的な姿勢が伝わってきた。

ベトナム戦争の続く一九六〇年代後期の創設当時、あちこちに自助努力よりも、むしろ“おんぶ”に“だっこ”といった受け身の姿勢が目立った ASEAN 諸国は、確かに地域ブロックとしての存在感と、したたかな自主性を育ててきたと言える。

そんなアジア近隣諸国と、一緒に考え、行動していくこと。それは、わが国の安定と繁栄にとっても欠かせぬ要素だ。

天の時・地の利・人の和

この年の九月、香港全域の主権移譲を決めた中英共同宣言の応援取材で、離任後三カ月ぶりに香港へ飛んだ。この中で、大きな事業が成就する際には、「天の時、地の利、人の和」が大切だということを強く感じた。

「天の時」とは、中国が文化大革命以後、経済建設を至上命題として本格的な開放政策を取り始め、先進資本主義諸国の資金や技術、経営のノウハウを強く求め出したこと。「地の利」とは、中国大陸と世界を結ぶ自由港、そして国際的な金融・貿易センターとしての香港の地位と機能が一段と重要性を増してきたこと。「人の和」とは、中英交渉が二年間という辛抱強い折衝の末、互譲の精神で平和裏にまとまり、大陸の政治に不信感を拭えないでいた多くの香港の人々にも安堵感を与えたこと。さらには、中国大陸を取り巻くアジア・太平洋諸国が、中英共同宣言を温かく見守ったこと、などだろう。

注目されたのは、韓国が香港を、ワシントン、東京に次ぐ重要な情報基地とし始めたこと。他方、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が、香港に隣接する中国の開放経済体制の最前線基地・深圳経済特区に数多くの代表団を派遣し出したこと。また、「正統性」をめぐる中国大陸と政治的に対立関係にある台湾側が、実際には香港を中国大陸を含めた第三国との貿易、人事往来、情報基地として活用し続ける姿勢を示していることだ。

一方、コンピューター工場設立など中国大陸への進出に本腰を入れ出した米国企業の中に、香港を「極東本部」とする会社が増え始めた。日本企業の動きも活発で、大小合わせて企業在籍数は九百近くに迫り、外国企業ではトップを占めている。

ともあれ、香港が中国の手に返ると決まったいま、将来を決める大きなカギは、多少の曲折はあっても中国が長期間にわたって開放政策を堅持できるかどうか。他方で、食糧、水、日用品などは大陸に頼り、社会制度、経済制度などは英国のものに安住してきた香港の人々が、いかに周到な自治能力をつくりあげていくか、にかかっている。

胎動する華人社会の交流

明るく八五年、新春早々の四日から、シンガポールで「国際華文（中国語）作家の集い」が開かれた。初の試みだったが、中国大陸、台湾、香港、米国、シンガポールの著名な中国人系作家や文学者が一堂に会する珍しい会合となった。当時、シンガポールは、中国とも台湾とも正式な国交関係はなかったが、開幕式ではオン・テンチョン副首相があいさつ。当地の作家や文化人らが五百人近くも参加するというにぎわいを見せた。

集いは七日まで続いたが、会議の性格と趣旨について、主催者の語る説明には、耳を傾けるべきものがあつた。

世界には、人種的には中国系であっても、中国大陸や台湾以外の東南アジアや日本、欧米諸国やアフリカなどさまざまな国や地域に住み、その国籍を取得している人たちも多い。国際的に見れば「中国人」というより「華人」と呼んだ方が、より包括性がある。また、この集いを「華人」とせず「華文」としたのは、人種や国籍を超え、華語（中国語）で文芸作品を書く人たちにも、門戸を開いておきたいからだ一と言うのだ。

いかにもシンガポールらしい発想だと思った。ここは、中国大陸や台湾から遠く離れた、東南アジアの一角に誕生した華人主体の多元国家。彼らはここに定着し、驚異的な経済成長を遂げつつ、「シンガポリアン」としての独自性を求めてきた。とはいえ、ここに住む

華人たちは言語、人種、文化的には、五千年の歴史と伝統を持つ中国と、簡単には乖離できぬ絆を持つ、いわば「国際化した中国人」なのだ。

期間中、「文芸交流の促進」と題する公開の座談会が開かれた。ここで中国大陸の代表から広東省汕頭市に、新しくシンガポール・マレーシア文学研究センターが設立されたことが明らかにされた。また、香港代表からは「シンガポールや香港は、華人文化の“支流”の地位にあるが、英文学が米国で栄え、オーストラリアにもノーベル文学賞受賞者が出るなど、“主流”に転化する可能性もある」との指摘があった。

中国大陸に生まれ、香港や台湾を渡り歩いた米国の大学教授は、華文の優秀作品の英訳も必要だと発言した。逆に、他民族の生んだ大作を、華文に訳出する作業も大切だ、という地元代表からの提一言もあった。

こうした発言には、地球上の人口の四分の一近くを占める華人の文化を、異なった国家や地域に住む華人社会全体の中で再検討し、さらに国際的視野の中で、華人文化を検証しようとする息吹きが読み取れた。

小国シンガポールが発案したこの集いに、華人社会全体をつき動かす、知恵と活力が胎動しているように思えた。

戦後四十周年と東南アジア

「去るもの、日々に疎し」という。戦後四十年、大きな時の流れは、過去の忌まわしい記憶を、さらに遠くへと押しやっていく。あの日中戦争や太平洋戦争で、アジアの「加害者」となった日本だけでなく、「被害者」の立場に置かれた広大なアジア地域の人々をも包み込むように。

そればかりではない。「被害者」の内側から、恩しゅうを超えて、「加害者」だった日本を冷静に、努めて客観的に見つめ直そうとする心の動きすら出始めた昨今である。

しかし、アジアの人たちが時折、日本や日本人の“独りよがり”な言動に、戦争の深い傷跡をよみがえらせ、不信感を呼び覚ますのも、半面の事実だ。この節目の年に、「戦後政治の総決算」として、中曽根康弘首相を頂点とする日本政府代表が、戦後初めて、靖国神社への公式参拝に踏み切ったことは、それを増幅させる引き金となった。

首相の靖国神社参拝に波紋

一九八五年（昭和六十年）八月十五日の終戦記念日。中曽根首相が靖国神社を公式参拝したこの日を、筆者はシンガポールで迎えた。すでに東京からは「公式参拝は必至」との情報が出ていた。

日本軍占領下で大量虐殺に遭遇したシンガポールでは十五日、最大の華字紙『南洋・星洲聯合早報』が、二ページにわたって戦後四十年の特集記事を掲載。「靖国」に象徴される最近の日本の動きに危惧の念を示した。

同紙は社説で、「A級戦犯が合祀された靖国神社への公式参拝は、かつて日本の被害者だったアジアの隣国から見れば、過去の歴史の免罪を図る赤裸々な行為だ」と手厳しく批判した。また、特集記事では、「日本人は、日本の“軍神”や戦争被災者のことだけを考えているのではないか」と問いかけ、日本が本当にアジアの平和と安定を望むならば、「日本軍の侵略で犠牲となったアジア大陸、東南アジア、南太平洋地域の人々の心の痛みを、決して忘れないでほしい」と訴えていた。

現在の東南アジア諸国は、ほとんどが第二次世界大戦後に独立した国々だ。産業革命を経た西欧列強がアジアに手を伸ばして以来、次々にその植民地や保護領となった。ビルマ、マレーシア、シンガポール・ブルネイは英国。ベトナム、ラオス、カンボジアはフランス。フィリピンはスペインに次いで米国。そしてインドネシアはオランダの支配下にあった。このため、日本と東南アジアの間には、歴史的なつながりはあったが、その関係は限られたものだった。

東南アジアの人々にとって、日本との衝撃的な出会いは、日本の対米英宣戦布告に端を発した太平洋戦争の時期（一九四一年十二月八日～四五年八月十五日）だった。日本は当時、これを「大東亜戦争」と呼び、アジア全域に「大東亜共栄圏」を築いて、その盟主たらんとしていた。すでに手中に収めていた朝鮮半島と台湾、また中国大陸への侵略に加え、太平洋戦争で、東南アジア地域でも「加害者」の立場に立ったのである。

二重映しの「対目観」根底に

シンガポールは、現代史の起点を一九四一年に置いている。まさに、「大東亜戦争」が起こった年である。当時、英国の植民地だったシンガポールは、緒戦で日本軍の手に落ち、暫時、「昭南島」と名を変えた。

一九八五年に出版された『写真で見るシンガポール史』には、第一章に、不沈戦艦と言われた英国のプリンス・オブ・ウェールズが日本の海空軍に撃沈される光景と、その後の日本軍による大量虐殺の様子が、大きく掲載されている。そこには、日本の姿が、「大東亜共栄圏」の名の下に、シンガポールの人々の頭上に君臨した英植民地主義者を駆逐する一方、返す刀で同胞たちを悲惨のどん底に陥れた「二重の像」として映っている。

インドネシアには、「日本軍が来なければ、独立はもう少し遅れたらろう」と言う人たちが少なくない。後のインドネシア国軍の母体となった「郷土防衛義勇軍」（ペタ）は、日本軍政下に組織された「青年団」や「奉公隊」が再編成されたものだ。これが、旧宗主国オランダの圧政をはねのける独立戦争の主力部隊に成長した。だが、同時に日本は、インドネシアの若者たちを「ロームシャ」（労務者）として強制徴用し、この結果、幾万もの人々が国内の各地で、あるいはビルマ戦線などに駆り出されて死んでいった。

「日本は、太平洋戦争である種の貢献をした。圧倒的多数の東洋人が絶対者と見なしていた欧米人に、決して負けない存在であることを示したからだ」

これは、日本の侵攻に根強く抵抗したフィリピンの長老、ロムロ元外相（故人）が、生前に心許す邦人に対し、戦争懐古の一コマとして語った言葉である。だが、このフィリピンも、その日本軍の手で、百万人に上る戦争被害者を出した国だ。

第二次大戦後、陸続と民族独立を達成した東南アジア諸国の人々は、その「対目観」の根底に、こうした二重映しの原型を持っている。そして、それは戦争の悪夢が薄れゆくいまでも、続いていると言える。

至る所で日本製品が氾濫

東南アジア各地を巡りつつ、強く感じるものの一つは、どこへ行っても日本製品が氾濫していることだ。自動車、カラーテレビ、各種電気製品、食料品など生活必需品が何でもそろい、かつ他の外国製品を圧倒している。さらに、建築関係、各種製造業、金融機関からホテル、百貨店、スーパーマーケットに至るまで「軍需産業」を除けば、ほとんど全産業分野に日系企業が進出している。

テレビやラジオには、日本の流行歌が流れ、ホームドラマやアクションもの、そして漫画が登場する。地域によって濃淡の差はあるものの、日本の生活様式がどっと入り込んでいる。

こうした現象は、一面で東南アジアの人々の意識に、日本人の持つ優れた側面を抱かせた。特に戦争を知らぬ東南アジア諸国の若者たちは、日本を一段と身近に感じ出している。当時、タイでは「カラバウ」（水牛）という音楽グループの歌「メード・イン・タイランド」が大はやりだった。そのさわりに、次のような一節があった。

「国産品の愛用を、と政府は言う。だが、メード・イン・タイランドは誰も買わない。メード・イン・ジャパンなら、すぐ売れるのに」

だが、半面で、日本のすさまじい経済進出は、貿易格差の拡大、日系企業による不当解雇、低賃金といった不満を呼んでいる。また、日本の雑然とした「文化進出」は、伝統的な文化の破壊につながる、という危機意識で見つめる人たちもいる。そして、大学生や知識人

の間には、「日本はアジアの苦しみの中で繁栄している」と述べ、「軍事的侵略にかわって、経済的・文化的侵略を進行させつつあるのが、いまの日本の姿だ」とまで言い切る人たちもいる。

アジア各国に「おしん」熱

こんな中で、いまでも強く心に残っていることがある。日本で視聴率の高かったテレビドラマ「おしん」は、タイ、シンガポール、マレーシア、中国大陸などでも大変な人気を呼び、一時期、「おしん」ブームに包まれていた。「シ」の発音が思うようにならぬタイでは、「おしん」が「おちん」となり、華人の多いシンガポールでは、「阿信」（あしん）となって、茶の間の話題をさらっていた。とりわけ、中年以上の主婦たちの間で評判が高かった。

シンガポールでは、「日本にも、本当に、あんな貧しい時代があったか」と尋ねる主婦もいた。首をタテに振ると、「私たちも子供のころは苦しかった。リンゴ一つ、オレンジ一つ買うのも大変だった。だが『おしん』よりはまだよかった。彼女は苦しい一家の口減らしのために人に売られていったが、私はずっと母さんのそばで大きくなることができた」と話した。

赤貧に負けず、耐え忍んで、ひたむきに生きる「おしん」の姿は、子供への格好な教育材料にもなっていたようだ。母親たちが、あまり「おしん」「おしん」と言うので、初めのうちは黙って聞いていた子供たちも、耳をふさぎ、手を口にやって、「もう勘弁して」というしぐさをするようになった、とある主婦は苦笑していた。

ところが、このテレビドラマをめぐる、シンガポールでは、ちょっとした論議が巻き起こった。日中戦争の場面で、「おしん」の夫が、息子に向かって「盧溝橋事変は、反日分子を鎮圧するための、やむにやまれぬ戦争だ」と語るシーンがきっかけだった。主要な新聞、特に華字紙には、連日のように論評や投書が登場、テレビドラマを糾弾した。

戦争シーンめぐり賛否両論

「人間には決して忘れてはならぬ史実がある。日本軍は中国を侵略した後、東南アジアに南下して当地にも魔手を伸ばし、数多くの人々を虐殺した。それは鉄の事実であり、しかも、その家族はまだ生きているのだ」

「これは先の教科書改ざんの再来ではないか。史実にそぐわぬドラマがなぜ、堂々と何カ月も放映されるのか。テレビ当局よ、こんな場面はカットすべきだ。これは文化の害毒だ」

あれほど人気をさらったドラマは、日中戦争のシーンを契機に、旗色を悪くしてしまった。

しかし、厳しい批判が続く中で、ある日「おしんに罪はない」という反論が載った。そして、「おしん」と、このドラマをかばう趣旨の意見や投書が、これに続いた。

「あの『おしん』の、家庭や隣人への愛、忍耐強く勤勉に働く姿、他人に対する寛容な態度。これらは、われわれにも十分理解できるもので、同じ人間としての共感を呼び、涙を誘うストーリーだ」

「動乱の時代に、ひたむきに生きる主人公が、女性蔑視という当時の日本の封建的な慣習にも負けず、息子を戦争にやるまいとするけなげな姿勢は、いじらしくさえある」

「私たちは、どうしてこのドラマを、より客観的な態度で冷静に見られないのだろう。なぜ、いつも中国や東南アジアと、日本の間を“怨念”を通してしか見られないのだろう」

この論議は、一九八五年の五月末から七月初めにかけて、一カ月余り続いてやんだ。長い間、中国や東南アジア諸国を見つめてきた一人として、厳しい批判には胸が痛んだ。そして、反論にホッと救われる思いがした。それは、日本人からの弁明ではなく、戦争の「被害者」であった同じシンガポールの人々の内部の議論だったからだ。

「歴史の教訓」を心の底に

だが、せつかくの心情を逆なでしたのが、中曽根首相による戦後初めての靖国神社公式参拝だった。過去の戦争で多大の犠牲者を出した中国をはじめ、近隣のアジア諸国の人々は、これに激的な批判を加えた。冒頭で述べたように、シンガポールの反応も手厳しかった。

しかし、日本国内では賛否両論が渦巻いていた。十月の初め、東南アジア各地の新聞は、中曽根内閣に対する日本国内の人气が最高を記録したと伝え、NHKの世論調査で六五・七パーセント、共同通信のそれで五九・六パーセントと、いずれも高い支持率を示したことを挙げた。ある現地紙は、これを「公式参拝のおかげ」と皮肉っていた。

アジア諸国の心ある人たちは、日本民族の資質や特性を注視している。その大きな視点が、日本人にとっては「反戦・平和」の原点である広島・長崎への原爆投下に対する姿勢である。彼らは、こんなふうに語る。

「被爆者の方々や、その遺族には心から同情する。しかし、あの原爆投下が、アジアの広範な民衆を悲惨な目に遭わせた、日本軍国主義の侵略に対する総決算だった、と感じている人間のいることも忘れないでいただきたい。日本の『反戦・平和運動』は、あくまでも、過去の戦争で日本の犠牲者となったアジアの民衆と、心の痛みを分かち合えるものであってほしい」

もう一つは、第二次大戦後に、主として欧米列強の植民地のくびきから解放され、独立した東南アジア諸国の人たちの声だ。

「われわれには、どうしても日本に対する『統一された像』が見えてこない。一方で日本人は優れていると思いつながら、他方では黙って許容できない姿が浮かんでくる。どうか、この『二重の像』を払拭して、心の底から信頼できる日本になってほしい」

日本の敗戦に直接的につながったのは、あの無残な原爆投下であった。その意味で、日本は確かに「被害者」の一面を持っている。だが、日本は中国や朝鮮半島を含めたアジア地域に対しては、常に「加害者」であり続けたという歴史的事実は、率直に認めなければならぬ。

その上に立って、日本のナショナリズムが“独りよがり”の狭隘さを脱皮し、アジア諸国の人々と、誠意のこもった対話ができるようにならなければならぬ。そのためには、広範なアジア地域で、まだ癒されていない「被害者の痛み」に思いをいたし、「歴史の教訓」というフィルターを、心の底に持っていることが必要だと思う。

インドに生じた変化の兆し

アジア地域はもちろん、世界の動静を考察する上で、見落とせぬ潜在的な重みを持つのが中印関係だろう。ここでは、第二次世界大戦後の中国とインドの関係を簡単に振り返りつつ、アジア総局長時代に二回、インドを訪れた体験をもとに、国際関係の上で、この国に現れた新しい変化の断面に触れてみたい。それは、インドの女性宰相、インディラ・ガンジー女史がシーク教徒に暗殺され、その長男、ラジブ・ガンジー氏が後継首相となった時期であった。

中印関係の蜜月と対立

周知のように、中国とインドの人口を合わせると、地球上の人類の三分の一を超える。また、ともに古来から世界にけんらんたる文化と伝統を誇ってきた国である。その近代史こそ列強諸国の干渉と制圧下に置かれたが、第二次大戦後、中国は内戦を経てソ連に次ぐ社会主義の大国となり、インドは旧宗主国イギリスから独立して非同盟諸国の中心的存在となった。社会制度こそ異なるものの、いずれも戦後に陸続と誕生した新興諸国の代表選手となったのである。

一九五四年四月、中国の周恩来首相、インドのネルー首相の間で、新しい国家関係を律

する「平和五原則」（領土主権の尊重、相互不可侵、内政不干涉、平等互惠、平和共存）が調印された。さらに翌五五年四月、両国首相はインドネシアで開かれた第一回アジア・アフリカ会議（バンドン会議）に列席。ナセル・エジプト大統領、スカルノ・インドネシア大統領らとともに、「植民地主義反対」「平和五原則」を柱とする「バンドン十原則」の創出に尽力した。そして、一九五〇年代を通じて、中印両国は新興諸国の協力と連帯に大きな役割を演じた。

しかし、六二年十月、国境線の画定をめぐる、両国間に武力衝突が起こり、それまでの友好関係は敵対関係へと変わった。しかも、すでに生じていた中ソ対立に絡み、ソ連が「インド支持」の姿勢を打ち出したため、中印関係は一段と悪化した。さらにインド亜大陸で早くから続いていた印パ紛争の中で、中国はパキスタンの肩を持ったため、事態は一層複雑化していった。

インディラ・ガンジー暗殺

一口にアジアといっても、日本と現実に利害関係が深いのは、中国と朝鮮半島、そして東南アジア諸国である。筆者も同様で、インド亜大陸の動向には関心を払っていても、実際には足は遠のきがちだった。

それを突き破ったのが、一九八四年十月三十一日に起こったインディラ・ガンジー首相の劇的な暗殺事件であった。インドでは、パンジャブ州に多いシーク教徒たちが中央政府に自治権を要求、強い抵抗を示していた。これに対し、政府当局はここを「危険騒乱地域」と指定、八四年六月五日、ついに軍隊を動員し、シーク教徒の総本山「ゴールデン・テンプル」を攻撃制圧する挙に出た。以来、不穏な情勢が続いたが、十月末日、インディラ・ガンジー首相が公邸内で、身にいた信任厚いシーク教徒の警護兵に射殺されるという悲惨な事態に発展した。

ネール首相の娘として、長年インド政府の頂点にあり、国際的にも名声の高かった女性宰相の死は、内外に大きな衝撃を与えた。筆者も直ちにニューデリーへ飛んだが、その葬儀の現場で初めて、後継首相に就任した長男、ラジブ・ガンジー氏の姿を見た。その顔は悲しみに打ち沈んでいたが、大柄で柔和な感じを受けた。外見からは、母親のようにきりりとした、使命感に燃えた面影は、みじんもうかがえなかった。

インディラ女史は、自分の後継者として、早くから次男のサンジャイ氏を据えようとしていた。彼は、いかにも利発な政治指向型の人間だった。若いころから頭角を現し、一九七六年一月には急増する人口を抑制するため、男性の断種措置を含む家族計画を打ち出した。だが、これが国民の猛反対に遭い、翌七七年の第六回総選挙で、与党・国民会議派の大敗を招いた。サンジャイ氏はその後、飛行機事故で死んだ。

一方、母親の非業の死で、いや応なしに首相の座に就いた長男のラジブ氏は、もともとパイロットで、夫人にもイタリア人を迎えるなど、政治にはあまり興味を示さなかったと言われる。このため、インドでは彼の政治的手腕を疑問視する人々も少なくなかった。

ラジブ氏の登場と新展開

ほぼ一年後の十一月十日、再びインドを訪れた。ラジブ・ガンジー首相が訪日に際し、朝日新聞社との単独会見に応じることになったためであった。インド首相としては、十六年ぶりの日本訪問であった。

五つほど、聞いておきたいことが頭に浮かんだ。日印関係は当然として、大きな関心は、十一月十九日に迫ったジュネーブでの米ソ首脳会談を、どう見ているかだった。というのは、ガンジー首相は十月の国連四十周年記念総会の際にレーガン米大統領と会談、同月二十六日、インドへの帰途に突然、予定を変更してモスクワに立ち寄り、ゴルバチョフ書記長と会談していたからだ。特に同書記長との会見は三度目で、世界の指導者の中では最も接触の深い人だった。ぜひ、ゴルバチョフ書記長の人柄や、政治姿勢を聞いておきたかった。

また、ガンジー首相は訪日の直前に、ベトナムを公式訪問することになっていた。アジアの大国として、また非同盟諸国の重鎮として、インドがどんな姿勢でカンボジア問題解決に臨もうとしているのか。さらに、インド亜大陸で長い間、確執を続けてきたパキスタンとの関係もつかんでおきたかった。

同時に、筆者にとっては、インドと中国の関係も大いに気がかりであった。ちょうど、ニューデリーでは、国境紛争を解決するための第六回中印会議が開かれていた。

シンガポールからニューデリーへ飛んで、直ちに当時のニューデリー支局長だった斉藤鑑三特派員と打ち合わせ、質問状をしたためて、インド外務省に提出した。

中印双方に緩和への動き

会見前夜の十二日、宿舎のホテルで床に就こうとしたとき、外で中国語が聞こえてきた。ドアを開けると、近くの部屋の前で、中国の劉述卿外務次官と、楊振亜アジア局長が立ち話をしている姿が見えた。全くの偶然だったが、楊アジア局長とは旧知の間柄で、この年だけでも四回目の出会いだった。まず呉学謙外相のシンガポール訪問のときに会い、バンドン会議三十周年の際にインドネシアで会い、リー・クアンユー首相訪中のときに北京で会い、思わぬときにニューデリーで、ばったり出会った。

「吉田さん、なぜニューデリーへ」と言うから、「ガンジー首相との会見のために」と言う。「そうですか。われわれはここで会談をやっていた。会談が終わったので明日未明に帰る」という話。「ぜひ話を聞かせてください」と言ったら、「あなたの部屋で話しましょう」ということで、一時間余り雑談をした。ホットな中印会談について尋ねると、楊さんはこんなふうに行った。

「あれはマラソン会談になりますね。中国の原則は『互諒互讓』だ。お互いに了解し合い、お互いに譲り合って、国境紛争を解決しようと言っている」

—インドはどうなんですか。

「インドは、われわれに譲るべきところはない、と言っている。だから、原則的な姿勢でなかなか一致できない。しかし、六回会談を重ねてきた結果、相手側に、お互いに国境紛争を解決しなければという誠意を感じ取れるようになった。今回も非常によく接待してくれ、今日はゴアに案内していただいた。中印国境の紛争解決には時間がかかるが、中国はこれからインドとのスポーツ、文化、経済の交流を進めていく姿勢でいます」

的中したゴルバチョフ評価

十三日朝、会見の行われる三十分前に首相府を訪れた。控えの間で、ラジブ・ガンジー首相の秘書とあいさつを交わすうち、「明日はネール首相のお誕生日です」という耳寄りな話を聞いた。

約束の十時半、真っ白い長袖の執務服を身に着けたガンジー首相は、にこやかに、われわれ二人を迎えてくれた。

まず、世界が注視する、一週間後に迫ったジュネーブでの米ソ首脳会談について質問した。

首相は「長期にわたる不信感を背負った米ソ双方には、まだ煮え切らないものがある」と、首脳会談の行方に懸念を表明した。そして「最優先課題は、あくまでも核軍縮問題にある。これが第二義的に扱われるなら失望せざるを得ない」と指摘した。

しかし、レーガン大統領の相手となる、ゴルバチョフ書記長の人格や識見を尋ねると、自信ありげにこう語った。

「いままでのソ連の指導者とは違う。自己の陣営ばかりでなく、世界全体の平和に思いを致している。彼は本気で核軍縮をやろうとしている。特にソ連は経済状態が苦しいので、どうしても軍縮をやらなければならぬ。ゴルバチョフ書記長は、そういう気持ちをはっきり持っている人です」

「三度会った印象は、率直で物事にこだわらぬ人。国内でも決定的な指導力を持ち、現在

のソ連をリードしている。米国をはじめとする西側諸国にとっては、いまこそソ連と話し合う絶好の機会だ」

ガンジー首相の語るゴルバチョフ像には、説得力があり、新鮮なものを感じさせられた。

次に、訪日の途次、ベトナムを公式訪問する首相に、カンボジア問題の見解を質した。ガンジー首相は「カンボジア紛争の解決で、インドに主導権はない」と言った。しかし「ベトナム訪問で感触をつかみ、利害関係の深い東南アジア諸国連合（ASEAN）の立場も考慮しながら、問題解決の方策を真剣に検討したい」と、平和解決に強い関心を示した。そのバランス感覚には好感を覚えた。

ネールの道歩んだラジブ

インドと長い間、対立を続けてきたパキスタン問題では、主として核開発について語った。首相は「状況証拠」として、「パキスタンには質の高い放射性物質を生産できる能力がある」と指摘する一方、「われわれは十一年前から核兵器製造能力を持ってきたが、実際には製造していない。核兵器には反対だ」と、インドの核に対する立場を明確にした。そして、この点では、「日本とともに同じ道を歩むよう協力していきたい」、と力説していた。

最後に、中印国境問題について尋ねた。

「あれは時間がかかります。しかし、六回の会談で双方が真剣に話し合っ、何とか解決しなければいけないという誠意が、お互いに分かるようになった」

と、首相は言った。それは前夜、中国の楊振亜アジア局長が語った言葉と同じようであった。そこで、「明日はおじいさん、ネール首相の誕生日だそうですね」と切り出すと、「そうです」とうれしそうに応えた。すかさず、ネール首相が中国の周恩来首相とともに、「平和五原則」や「バンドン十原則」をつくり出し、アジア地域の平和と安定に大きな役割を果たした点を述べ、新たな中印首脳会談の可能性を打診してみた。すると、

「私はそれをやってみたい。祖父が歩んだと同じ道を、私は歩みたい」

と述べ、中印首脳会談の実現に意欲的な姿勢を見せた。

一時間余りの会見を通じて、母親のインディラ・ガンジー女史とは違い、清新で柔軟性のある人柄を感じた。それは多様性のインドを治め、アジアや世界の平和と安定を求めるにふさわしい資質だ、と私には思えた。

この年の十一月下旬、ジュネーブの米ソ首脳会談では、ラジブ・ガンジー首相が強調していた核軍縮での合意が生まれ、その後の東西冷戦体制終結への大きな布石が打たれた。

同年十二月初旬には、インド亜大陸七カ国の間で、南アジア地域協力連合（SAARC）が創設された。バングラデシュの提唱だったが、これも、ラジブ・ガンジー首相の登場によるところが大きかった。

そして、一九八八年十二月、ラジブ・ガンジー首相は、インド首相としては実に三十四年ぶりに中国を訪問。中印両国はこの場で、長い国境紛争の凍結で合意に達した。

運命のいたずらと言おうか。ラジブ氏は一九九一年五月二十一日、総選挙の遊説中に、インド南部で過激派の爆弾テロに遭遇、わずか四十五歳で、この世を去った。

しかし、短命だったとはいえ、彼の登場によって、インドが潜在的に果たした米ソ、中印関係を含む一連の緊張から緩和への役割は、高く評価されてしかるべきであろう。ラジブ氏は、母親より祖父の道を選んだ政治家だったと言える。

ベトナム訪問で感じたこと

私のアジアとのかかわりは、少年時代に十一年間住んだ台湾から始まった。新聞記者になってからは香港、中国大陸、そしてシンガポールを基地に東南アジア諸国へと広がっていった。しかし、それはマレーシア、タイ、インドネシアなど東南アジア諸国連合（ASEAN）中心だった。

インドシナ三国では、カンボジアとラオスでの取材には当たったが、ベトナムに足を踏み入れたことはなかった。ここが戦場だったころには、サイゴン（現在のホーチミン市）に一騎当千の常駐特派員が二人いた。逆に、南北ベトナムが統一された後、カンボジア紛争が起これ、さらに中越国境で武力衝突が発生してからは、外国人記者の入国はかなり制限され、そのカバーには、主としてバンコク特派員が当たっていた。

中国南部に似たハノイ

一九八六年二月初旬、ベトナムを初めて訪れる機会がきた。カンボジア紛争が長期化し、泥沼の膠着状態に陥っていた時期であった。中越間の武力衝突は短期間で終わったものの、抗争は長く尾を引いたまま。背後では、なお中ソ対立が濃い影を落としていた。そんな中を、赤道直下のシンガポールからクアラルンプール、バンコクを経て、ハノイへ飛んだ。

空港からホテルへの道すがら、強く感じたことは、東南アジアの一角にありながら、それは南寧とか昆明など、中国南部に似ているということだった。大きな並木道。行き交う自転車の群れ。周りの田んぼや畑の光景。そこに点在する水牛の姿。すれ違う人の表情も、中国の南の人々と区別がつかない。

それから、ハノイの街に入って、貧しいところだなと思った。長い戦争に耐え抜いてきたベトナムの人たちは、同時に耐乏の苦汁を味わってきたのだ、という実感が胸を突いた。その思いは、ハノイで一流のトンニャット・ホテルに入って、一段と強くなった。まず、部屋に入るのに、ずいぶん“技術”を要した。というのは、鍵穴がばかになっていて、なかなかかみ合わない。上下、左右に鍵を動かしながら、やっとの思いでドアを開けることができた。

広い部屋に入って、ホッと一息ついたのも束の間。トイレに入ると、備え付けのペーパーが、ごわごわとして茶色っぽい。タオルも、ちゃんと洗濯はできているのだが、煮しめたような古いもの。トイレのフラッシュ・バルブをひねると、水がちょろちょろとしか出ない。大きいものが流れないので、部屋の花瓶を持って来て、何度も水を汲んでは流す始末。これは大変なものだと思った。

ホアン・トン書記と会う

ハノイ到着の夜、ホアン・トン・ベトナム労働党中央書記兼党中央宣伝部長が歓迎してくれた。記者歴四十年の大先輩で、中国の『人民日報』に当たる、労働党中央機関紙『ニャンザン』の総編集（社長）を長年務めた筋金入りの人だ。

プレス・センターの所長や日本担当の責任者らが同席。食事を挟んで三時間ほど話をした。開口一番、こうあいさつした。

「私は、ベトナムを勉強したい。理解したい。そして、皆さんの友人になりたいと思ってきました。しかし、十分お調べになったと思いますが、私は北京特派員も経験し、中国に友人がたくさんいます」

すると、ホアン・トンさんは「ハノイは初めてのようですが、第一印象はどうですか」と聞いてきた。そこで、

「今日午後、到着したばかりで、まだよく見物していません。だが、感じたことが二つあります。一つは、ハノイは東南アジアの一角にあるけれども、中国の南部によく似ていると思いました。もう一つは、大変申し訳ありませんが、ハノイは東南アジアのどの首都よりも貧しいと思いました」

と、率直な印象を述べた。そうしたら、ホアン・トンさんは苦笑しながら、それでも悪びれずに言った。

「ハノイは確かに貧しい。ベトナムの中でも一番貧しいところです。でも、ほかの都市もちゃんと見ていってください。できる限り案内します」

同業の大先輩に親近感

こんな出会いで、双方は急速に打ち解けていった。当時、中越関係は極端に悪く、バンコクやジャカルタなどで・ベトナムの高官と会っても、彼らは絶対に中国語をしゃべらなかつた。しかし、ホアン・トンさんはこの夜、時折、日本語の通訳を介さずに、中国語で話し出した。かつて延安にいたことがあり、毛沢東、周恩来、鄧小平といった中国の最高指導者と会ったこともある、と語ってくれた。いつの間にか、この同業の大先輩に親しみを覚えていった。

話が本題に入ったとき、私は「カンボジア紛争の解決を心から望んでいます。そのためにはベトナム軍の早期撤退がぜひ必要です。そうすれば、日本も米国も、さまざまな形の援助が可能になる」と言った。

すると、ホアン・トンさんは「いや、われわれも撤退している。今年は恐らく四万人引くだろう」と語った。「いま、どのくらい駐留しているのですか」とただすと、「分かっているが、その数は言えない」という答え。押し問答を繰り返したが、軍事機密に属するだろう。その数だけは教えてくれなかつた。

そこで、「カンボジア問題解決の重要なポイントの一つは、ベトナムと中国の関係だと思ふ。中国にどう対処していこうとしておられるのですか」と聞いてみた。

「赤いじゅうたんを敷く」

ホアン・トン氏は、こんなふうにした。

「ベトナムと中国の関係は、歴史的に非常に長い。ベトナムは一千年、中国の支配下にあった。その後、独立したが、中国は王朝が替わるたびにベトナムを攻めてきた。中国の大軍が撤退すると、ベトナムは外交使節団を組織して、象牙の彫り物や真珠の首飾りなど、いろいろな宝物を持って中国の都に行った。そして、うちの将軍は短気者だから、つい抵抗してしまいましたと頭を下げ、和睦をして帰ってきた。この繰り返しが、中国とベトナムの長い歴史的関係だったのです」

そして、こう続けた。

「われわれには、大国（中国）のメンツの前に、赤いじゅうたんを敷く（礼節を尽くす）用意がある。本当に戦争をやめたいと思っている。そのためには、ベトナムと同じく、中国にも手を引いてもらいたいのだ。それを同時にやりたい」

要するに、ベトナムはカンボジアから撤退するが、同時に中国もポル・ポト派の支援をやめてもらいたい、というのだ。

カンボジアでは、ベトナム支援下のヘン・サムリン政権と、ベトナム侵攻に反対する三派連合政府（シアヌーク派、ソン・サン派、ポル・ポト派）が戦っていた。しかし、強大な軍事力を持つポル・ポト派支援を抜きに三派連合が抵抗力を維持できるかどうかという懸念があり、これは中国だけでなく、ASEAN 諸国も難色を示していた。

半面、ASEAN 内部も微妙で、ベトナムに対する姿勢では“一枚岩”とは言えない。インドネシアには、なお中国への不信感があり、ベトナムとの対話を崩さないでいる。逆にタイは、カンボジアに隣接しているので、ベトナムには心を許せない。シンガポールはタイに近い立場。マレーシアはインドネシアの考え方に近いが、もしタイが危なくなったときには、自国にも影響するから困惑の状態。ASEAN の足並みがそろわぬことを、ベトナムはベトナムでちゃんと見ている。

別れ際に、「中越関係の改善を心から望んでいます」と言うと、ホアン・トンさんは私の目をじっと見て、「もうしばらくです」と言った。

国境の町・ランソンへ

二日後の早朝、一九七九年春の中越紛争で、中国軍の攻撃を受けた国境の街、ランソンへ向かった。二十代前半に三年間、日本に駐在したという若い職員が、通訳としてついてくれた。日本好きの愉快的な青年だった。ハノイ市街を走るバスは、本当にオンボロだった。

よく動いているなと思って見ていたら、彼は「ベトナムのバスはくず鉄みたいでしょう」と言って笑った。自転車の群に混じって時折、オートバイがすれ違っていった。青年はそのたびに、あれはチェコ製ですよ。あれは東独のオートバイ。これはフランス製。あれはホンダ。ホンダはナンバー・ワンだーとはしゃいでいた。

北進を続けるうちに、沿道の右側に凹凸の激しい、小さな山が続いて見えた。それは、桂林の漓江沿いの、そして雲南省・石林一帯の山々を連想させ、一瞬、中国の南部を走っているような錯覚を覚えた。

「人も自然も、こんなに似ているのに、中国とベトナムはなぜ、こんなに消耗し合うのだろう」と言うと、青年は「そうですね。やはり国と国の関係は一〇〇パーセントというのはだめですね。八〇パーセントぐらいの関係の方がいいですね」

と言った。うまいことを言うな、と思いながら、ふと「腹八分目に医者要らず」ということわざが浮かんだ。

ランソンの町は、修復作業も進んでいたが、なお戦火の跡が残り、廃墟同然の状態だった。痛ましい光景を幾枚か写真に収めた。カメラを持った、よそ者の来訪は、まだ珍しかったのか、子供たちがぞろぞろと寄ってきた。みんな貧しい身なりをしていたが、笑顔を見せると、声を上げて歓迎してくれた。そのあどけない表情を見ながら、戦争の罪悪を思った。

南部で見た微妙な変化

ハノイへ戻った翌日、ホーチミン市（旧サイゴン）へ飛んだ。この南部の大都市は、貧しさが身にしみた北部の首都ハノイに比べると、かなり裕福そうに見えた。北と南の格差を強く感じた。

昼食をとろうと、大きなシアター・レストランに入ると、結婚式の披露宴にぶつかった。われわれは二階で食事をとったが、一階は宴席で占められ、しかもフカのひれとか、カニ、アワビなど豪華な料理が並んでいた。「一体、だれの結婚式だろう」と尋ねると、新郎が華僑、新婦がベトナム人という話。

食事を共にしたホーチミン市の幹部に、南部の華僑政策をただすと、「最近では、資金のある華僑と、ベトナムの政府系が合弁で、いろいろな仕事を始めている」と言った。「ショロンの華僑街を見たい」と言うと、快く案内してくれた。ビニール袋をつくる工場と、サンダルやスリッパの製造工場を見学した。華僑の経営者が、「ひとこと違って、いまベトナムは華僑の持つ技術、資金、流通の才能を活用しながら、経済の活性化を図ろうとしている。対外関係も開きつつあり、貿易量のナンバー1がシンガポール、ナンバー2が香港、ナンバー3が日本です」と話してくれた。

ドル・ショップをのぞくと、酒やタバコ類は欧米のもの。ところが、テレビ、ラジカセ、オートバイなどは、ほとんど全部が日本製だった。魔法瓶は「中華人民共和国製」が売られていた。政治の垣根を越えて、経済活動はじわじわと浸透しつつあった。

ベトナムの人々、特に南部の人たちは、とにかく日本の製品を、とても欲しがっている様子だった。いろいろな声を聞いた。スペアパーツがない。物をつくる原材料がない。海産物はたくさん採れるが一その選別、規格、こういうことが難しい。簡単なものでいいから、技術をいろいろ教えてほしい。最近、ホーチミン市で日本工業展覧会が開かれたが、連日、超満員の人出だった一。

相手を変えさせる道を

たった一週間の、駆け足の旅だった。しかし、「百聞は一見に如かず」という感触は、つかむことができた。

「われわれには、大国のメンツの前に、赤いじゅうたんを敷く用意がある」と語った、ベトナム有数の中国通、ホアン・トン党中央委書記の言葉が耳に残った。北と南の格差の大きさとともに、南部では政治のカベを乗り越えて入ってくる華僑や華人の商魂のたくまし

さと、それを受容するベトナム人のしたたかさが強く印象に残った。そして、あちこちで聞いた、ベトナムの人たちの日本に対する熱い思いも、忘れることができない。

ベトナムの経済的苦境からの脱出は、カンボジアからの撤退なしには不可能だろう。この点で、ベトナム指導部の賢明な判断を待ちたいと思った。と同時に、どうすればそれが可能になるのか。外側の世界も、真剣に考えねばならないと思った。

そして、ベトナムに芽生え始めた微妙な変化をとらえ、カンボジア紛争に深刻な利害関係を持つASEAN諸国と、ともに知恵を絞っていく必要がある、と強く感じた。「時を得た協力や援助は、相手を利すると同時に、相手を変えさせることができる」—こんな思いを抱きながら、ベトナムを後にした。

対立から緩和へ動くアジア

ベトナムからシンガポールに戻った私は、間もなく帰任の途について。一九八六年二月下旬だった。香港支局長に続くアジア総局長の就任だったので、四年余り現地でアジア情勢を取材したことになる。やり残したことがたくさんある、と半ば自責の念にかられた離任だった。しかし、私なりに、アジアの動きと変化をつかむことができた、という思いがあった。

特に、巨大な中国大陸で起こり出した近代化への転換のうねりが、アジアの広範な国々や地域との関係を、「対立」から「緩和」へと誘う大きな要因となったことを強く感じていた。その背景には、アジア・太平洋地域を挟んで長い間、対峙してきた米中関係が好転し、ついに国交正常化へこぎつけたという局面があった。また、ソ連にゴルバチョフ書記長が登場して以来、限定的とはいえ、中ソ関係が厳しい対立から、和解への兆しを示し出したことも、微妙に影響していたと言える。

中国とアジア諸国の関係

帰国を前に、シンガポール国立大学で開かれたアジア問題セミナーに招かれ、「開放体制下の中国とアジア諸国の関係」について講演する機会があった。会場には地元のほか、インドネシア、マレーシア、タイ、それに香港、台湾などからも、華人（中国系市民）の企業家や研究者たちが多数参加、熱気ある質疑、討論が繰り広げられた。

当時、世界の人口は四十八億（現在は五十六億）と言われたが、インド亜大陸を含めると、半数以上がアジアに住む。興味深いのは、この地域で中国語（方言を含む）を話す華人社会が中国大陸、台湾、香港をはじめ、シンガポール、インドネシア、マレーシア、タイ、フィリピン、ラオス、カンボジア、ベトナムなど東南アジア全域に及んでいることだ。こんな視点でとらえると、アジア、とりわけ太平洋に面した東アジア・東南アジアは、さまざまな命運を背負った「華人」と、「非華人」の社会に分けて考えることも可能だ。

動き出したインドネシア

中国が経済建設を至上命題に、対外開放政策と国内経済の活性化に力を入れ出したのは、一九七〇年代の末期。それから七年余り。内部には、経済改革の在り方をめぐって意見の相違が認められるが、基本路線には変化はなさそうだ。そして、私の在任中に、多くのアジア諸国が、この中国大陸との現実的な付き合い方を、真剣に検討し、かつ実施に移し出したことは、見落とせぬ事態であった。

この点で、最も注目されたのは、東南アジア最大の国、インドネシアと中国の関係だ。ご承知のように、インドネシアでは一九六五年に「九・三〇事件」が起こった。インドネシア共産党のクーデター未遂事件だが、インドネシア側には、これに中国共産党の動きが絡んでいたという認識が強くあり、中国との外交関係は六七年十月以来、凍結状態に置かれた。

しかし、十八年近くを経た八五年七月、両国間では、政経分離を建前とする「直接貿易

協定」が、シンガポールで調印された。

調印式を現場で取材したが、そのときのインドネシア代表団の積極的な姿勢が、鮮明な印象として残っている。それは、なお中国に対する不信感を根強く残す、軍部や政府の姿勢とは対照的なものだった。

代表団の数は、中国側の四人に対し、インドネシア側は八人。しかも、インドネシア側は調印式の三十分以上前に姿を現し、中国側代表団の到着を、いまや遅しと待ち受けていた。そして、調印を前に、あいさつに立ったインドネシア側の首席代表は、「両国の関係は歴史的に非常によかった。交易も昔から随分あった。これを何とか本格的に再開し、拡大していきたい」と、熱っぽく訴えていた。

外交関係再開には、まだ時間がかかるだろうが、経済的にはインドネシアにも、背に腹は替えられぬ事情があった。当時、石油を含め、第一次産品の値段が、かなり下落していた。しかも、米国内には保護主義が台頭し、日米間にも貿易摩擦が生じていた。こうした中で、開放体制に入った中国大陸との交易に関心を抱く人々が増え出した。だが、従来の香港やシンガポールを通じた間接貿易のままでは、手間もマージンもかかる。それを直接貿易にして交易量も増大させたい、という考慮も働いていたのだろう。

リー首相の念入りな訪中

インドネシアが動くことによって、近隣のシンガポールやマレーシアも動きやすくなる状況が出てきた。

同年九月にはシンガポールのリー・クアンユー首相、続いて十一月にはマレーシアのマハティール首相が中国を訪問した。

リー首相の訪問は念入りだった。このとき、筆者も同じ飛行機に乗り、北京へ先回りしたが、リー首相一行はまず上海空港で降り、済南を経て山東省曲阜の孔子廟を訪れた。その後、古都西安へ行き、発掘された秦時代の「兵馬俑」を参観した後、北京へ入った。リー首相の先祖は福建省出身の客家であり、かつ政治家としてのリー首相は、儒教思想に深い関心を寄せていた。

他方、中国側の演出も大変なもの。北京では、当時の趙紫陽首相が天安門広場でリー首相一行を歓迎、国交未回復だということに、礼砲をぶち上げていた。その後、李先念国家主席、そして実力者・鄧小平氏が会見するという最高の接待ぶりだった。

リー首相はこの後、経済開放区となった大連を訪問。帰途には台湾の対岸にある厦門の経済特区、さらに香港に隣接する深圳経済特区を視察した。当時はシンガポール経済も不況下にあり、建国以来初のマイナス成長に陥っていた。ビジネス・チャンスをうかがう絶好な機会でもあったのだろう。

マレーシアも対中改善へ

次いで、十一月にマレーシアのマハティール首相が訪中した。この国もスズ、ゴム、パーム油など一次産品の価格の下落で、大きな経済的打撃を受けていた。この苦境を何とか打開したいとする気持ちが強く働いていたのだが、同時に対中改善を図るためには、いくつかの難題を抱えた訪問でもあった。

一つは、対中貿易は主としてマレーシアの華人がやっていた。これを政府主導型でやりたい。つまり、華人ばかりでなく、マレー人も強く関与していきたいということ。もう一つは、インドネシアと同じような、マラヤ共産党の問題があった。ここには、マレー人の貧困層も参加していたが、その実権は華人系が握っていた。さらに、多民族国家のマレーシアでは、マレー人に次いで華人の比率が高く、一九六九年五月十三日に、マレー人と華人の間に大規模な“人種騒動”が発生、それがなお陰に陽に尾を引いていた。

マハティール首相は、こうした課題を背負って訪中したが、中国側は同首相一行を大歓迎し、このときも、実力者・鄧小平氏が会見した。そして、

「あなたの国も、私の国も、ともに発展途上にある国だ。われわれの関係は発展途上国同

士が、どうすればお互いに協力し、利益を得ることができるか—これがマレーシアと中国の関係の主流だ。そのために、われわれは努力すべきだ」

と語った。この言葉を聞いたマハティール首相は、とうとう共産党の問題を持ち出さなかったという。そして会談後、「マレーシアも中国も、ともに貧しい国だ。貧しい国がどうやって協力し、発展していくか。これが両国間の主要な問題だ。その観点に立てば、共産党のことは小さな問題だ」と随行記者団に語った、と現地紙は伝えていた。

こうした動きの陰に、興味深い現象があった。東南アジア地域の華僑・華人社会の中から、居住国と中国大陸を取り結ぶ人たちが出始めたことだ。

陰に華僑・華人社会の動き

先に述べた、インドネシアと中国の「直接貿易協定」の成立には、インドネシアに住む華人の海運業者たちの努力があった。また、調印式がシンガポールで行われた裏には、インドネシアとの関係を重視するとともに、中国との関係改善を求め出したリー・クアンユー首相の深謀遠慮があったと言えよう。華人が主体だとは言え、マレー系、インド系、欧亜系（ユーラシアン）を含む、この多民族国家には、「華人」と「非華人」の間の交流を円滑にする役割と資格がある、と思った。

インドネシア戦略国際研究所のユスフ・ワナンディ所長も忘れ難い人だ。この国の外交戦略を立案する「ふところ刀」と言われる存在だった。色浅黒く、外観上は生粋のインドネシア人に見える彼に、ある食事のテーブルで、ぶしつけな質問をしてみた。

「あなたのご先祖に、中国系の人はいませんか」。すると、ワナンディ氏は「私は華裔（華僑の末裔）です」と言った。そして「われわれはもう何世代もインドネシアに住んできたし、全くのインドネシア人です。だから、まず第一にインドネシアの利益を考えます。しかし、先祖がいた中国との関係改善は望んでいます」と話した。

彼のような存在は、マレーシアにもタイにもいた。そして、居住国の利益を優先させつつ、敏感な外交戦略を練っていた。そればかりではない。東南アジアに根を張る華僑・華人系財閥の中にも、居住国と中国との交流に知恵と力を発揮する人たちが出始めていた。時の動きとはいえ、極めて重要な対応だと思った。

アジアの多角的関係も好転

ところで、アジア全体にまたがる多角的な関係にも、微妙な変化が生じつつあった。いくつか挙げられるが、当時の最大の難題は、やはりカンボジア紛争だった。利害関係の深い周辺諸国では、インドネシアを窓口として、東南アジア諸国連合（ASEAN）による解決への模索が続いていた。だが、中越対立が絡むこの問題で、インドネシアと中国の関係に好転の兆しが見え始めた意味は大きい。その上、ベトナムも対米改善の姿勢をとり始め、カンボジアを挟んで反目するタイとの関係調整にも動き出した。

インドと中国の関係にも前進が見られた。世界で一位と二位の人口を擁する両国が、国境紛争解決への会談を続ける中で、八五年十一月下旬には、相互の貿易量を一举に倍増することで合意した点も見落とせない。そのインド亜大陸には同年十二月八日、七カ国による「南アジア地域協力連合」（SAARC）が誕生、総人口十億（当時）の連帯機構として正式に発足した。

さらに、朝鮮半島では「南北対話」が次第に定着し、韓国はこれと並行して、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）と緊密な関係にある中国への接近を図りつつあった。卑近な例だが、シンガポール滞在中、韓国大使から、中国の通商代表部代表への関係改善の打診を受けたことがあった。政治的交流は至難の時期だったが、当時の中国側代表が、すまなそうな表情で、「私の権限は経済、文化活動に限られています」と語っていたことを思い出す。

帰任の途次、総選挙に揺れるフィリピンと、韓国の首都ソウルに立ち寄った。

韓国にも生じた新たな模索

フィリピンでは、訪問中にマルコス時代が終わり、政敵だったアキノ夫人が新大統領に就任した。だが、外交関係に大きな変化はなく、先祖が福建省の出身だというアキノ大統領は、対中関係では前向きの姿勢を示していた。就任早々、国内の華僑や華人に対しても、「これから、わが国は経済建設に積極的に取り組まなければならない。皆さんの援助、協力を期待する」と訴えていた。

韓国を訪れたとき、ソウルを眺望できる「南山」へ登った。ソウルはすごい大都市になったと思った。失うべきものをあまりにも持ち過ぎたという感じを受けた。そして、「南」が「北」に仕掛けることは、まず考えられないと思った。訪問中、シンガポールでお会いした韓国屈指の知識人、『東亜日報』主筆（当時）の権五琦さんの歓待を受けた。権さんは「南北関係は非常に難しい。緩和に向かうと思ったら緊張する。しかし、大小の波乱はあっても、北と南の対話の線は切れないでしょう」と語っていた。また、「北」との関係を安定させるためにも、中国との関係改善に深い関心を寄せていた。

一九五〇年代、六〇年代、七〇年代、八〇年代とアジアの動きを見ると、いまが一番、いろいろな太い糸、細い糸で結ばれ出したときだと思った。もちろん、一筋縄ではいかぬ複雑な形で流動していくのだろうが、全体としては、緊張から緩和への局面が訪れつつある、という実感を持った。しかも、アジア地域は、アフリカ、ラテンアメリカに比べて、人口が圧倒的に多いばかりか、最も発展の潜在性を秘めたところだ。日本もその一員として、他のアジア諸国と協力し、知恵を絞りながら、自他共に生きる道を求め続けなければならない。こんな気持ちを抱きながら、約千五百日ぶりに祖国の土を踏んだ。